

---

# 僕

深山暁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕

### 【Nコード】

N3342F

### 【作者名】

深山暁

### 【あらすじ】

幼い頃、ある事件に巻き込まれ「兄」を失った「僕」は、その「兄」にひどいコンプレックスを抱えていた。犯人は捕まらず「僕」の傷も癒えないまま、20年の時がたった。しかし、兄の命日が近づいたある日再び事件は動き出す。そして、「僕」は衝撃の事実を知ることになる。「兄」は何故殺されたのか。「兄」の隠された秘密とは？20年の時に埋もれた真実が明らかに・・・。

## プロローグ

「僕（仮題）」

残業を終え、帰路につく。

会社から電車で駅2つ。そこからさらに徒歩10分。閑静な住宅街の一角に建つ築15年だといふこのマンションを、僕はなかなか気に入っている。

高校卒業後、1年浪人したのち、地方の国公立大学に入学し、4年で卒業。そのまま24歳で今の会社に就職し、3年が経った。もう新人じゃいられないという焦りと、まだ新人でいたいという甘えの間で揺れ動きながらも、普通に幸せと呼べるであろう日々を送れていると思っている。

玄関の扉を開け、暗く静かな部屋にため息をひとつ。曆の上ではもう秋のはずだが、未だ残暑を引きずっている気候に、ちよつと歩いただけにもかかわらず、Yシャツにはじつとりと汗がにじんでいた。部屋の明かりと一緒にエアコンのスイッチもいれ、ソファに倒れこむようにして座った。ネクタイを緩めて放り投げる。こんな時、奥さんでもいれば。と思わないこともないが、独り身の気楽さを捨てきれず今に至る。まだ、結婚に焦る歳でもない。家庭を省みなければならぬ煩わしさに比べれば、独り身の寂しさや面倒など対した事ではないように思われた。

紫煙を吐き出し、目をつぶる。喫煙が習慣化されたのはいつからだろうか。最初は一日に一本吸うか吸わないかだったのが、今では5、6本。多いときには10本くらいは吸うようになっていた。入社3年でこれ、なのだから、年を重ねれば重ねるほど、喫煙数も比例して増えていくことは目に見えていた。

「行き着く先は肺癌かな。」

ふつと自嘲気味につぶやいてみる。それでも、止める気も、止めら

れる自信もないあたり、僕もすでにニコチンの虜なのだろう。

父も母もタバコは吸わなかったが、唯一祖父だけが大の愛煙家だったらしい。僕が生まれたときには祖父はすでに亡くなっていたため、僕は祖父に直接会ったことはないが、相当のヘビースモーカーで、彼の遺体の肺は真っ黒だったと聞いた。この後は、だからタバコは止めろというお決まりの小言に繋がる話なのだが。そんな話の甲斐なく僕は煙草を吸い続けている。

もう忘れなさい。

父の諦めたような言葉が響く。

どうして……。

母の悲痛な嘆きが浮かぶ。

そういうものを聞きたくなくて、僕はニコチンを肺と頭に送り込む。この時期は特にひどくなる。社会人になってからは、仕事や煙草という、僕にとつてある種の逃げ道が出来たため、以前に比べれば、僕はだいぶ救われていた。

普通、会社員は仕事のストレス発散のためにタバコを吸うのだろう。もちろん、その他の理由で吸っている人もいるだろうが。

僕の場合は、仕事も逃げ道の一つでしかなかった。

助けて！

泣き叫ぶ子供の声。

お父さん、お母さん！

親の名を呼びながら逃げ惑う子供。それに襲い掛かる黒い影。鮮やかな紅。そして、影は自分へと……。

けいすけ！

「つつ……また、あの夢か。」

脳裏に焼きついた映像は夢となって、いとも簡単に浅い眠りを打ち

破る。

いつものことだ。

この夢も。眠りが浅いのも。

そつと目元の傷をなぞる。この傷がついた時の事は、僕はあまり覚えていない。ただ、恐怖に満たされていた。

そして、その日は、僕の兄さんだった人の命日でもあった。

「もう、20年か・・・。」

この傷がついた日。兄さんが死んだ日。

忌まわしい事件の起きた日。

20年前

「じゃあ、お母さん、お父さんの様子を見に行ってくるからね。二人でいい子にお留守番してるのよ。お兄ちゃん、啓介の事よろしくね。」

「はい。」

靴を履き、そう言った母親に、お兄ちゃんと呼ばれた小学生くらいの男の子は弟の手をしっかりと握りながら元気に返事をした。それに満足した母親は、二人の頭を一撫でして、出ていった。そして、母親の姿が玄関の外に消えると、男の子は不安そうに自分を見上げる弟へ笑顔を向けた。

「だいじょうぶだよ。おかあさんは、すぐ帰ってくるから。一人でおしごとがんばってるおとうさんに会いに行っただけだから。もう、けいすけも小学生なんだから、一日くらいおかあさんいなくても平気だよな。」

自分の手を握りしめたまま顔を覗き込む兄に、弟も安心して笑顔でうなずいた。

「うん。」

「よし、えらいぞ。」

自分より頭一つ小さい弟の頭をグリグリと撫でて笑った。

これから、酷い惨劇の被害者になるなどと、この時の兄弟は知るはずもなかった。

事件は、母が単身赴任の父親の元へ、着替えやその他の荷物を持って世話をしに行つて日に起きた。最後まで、小学生の子供を二人残していくことに母は躊躇していたが、兄が一日くらいなんとかするといい切つたため、心配しつつも向かうことになったのだ。そうは言つても当時の兄は、小学4年生。両親がいないことに不安もあっただろうに、母にも弟の僕にもそんな様子を微塵も見せず笑つていた兄は、やはりしつかりしていたのだろう。だからこそ、母も兄の言葉を信頼したのだと思う。僕にとつても、兄はとても大きな存在だった。単身赴任で家にはめつたにいない父の代わりでもあつたし、困つた時に手を差し伸べてくれるスーパーマンのようでもあつた。僕は兄の笑顔が大好きだった。

「いつかぼくもお兄ちゃんみたいになるんだ。」  
そう、幼い僕が恥ずかしげもなく宣言した時も、照れくさそうに笑つていた。

なぜ、兄だったのか。  
その問いをもう何年も繰り返している。  
答えなど出てこないとわかつているのに。

絶対的な存在であつた兄は、死んでもなお、僕に影響を与え続けていた。いや、むしろ死んだからこそ、それは複雑なコンプレックスとなつて僕の中に残り続けているのかもしれない。

僕の記憶では、兄は完璧な人間だった。自分の理想そのものであつた。それが奪われ、僕は矢印を見失つた。どれだけ一生懸命勉強しても、兄ならもつと出来るのではないだろうか、とか、短距離でいい記録を出しても、兄ならもつと速く走れたのではないだろうかなどと考えていた僕は、兄の亡霊にとりつかれているのと大差なか

ったと思う。

今でもたまに思う事がある。兄なら……。それはもう、僕の行動指標そのものだった。タバコはそれから逃れるためのものでもある。頭の動きを鈍らせて、少しでも兄の事を考えるスペースが減るように。それでもしなれば、いつか僕は発狂し壊れるだろう。

一度だけ、その兄の呪縛から逃れようと本気であがいたことがあった。高3の時だ。何故この時だったのかはわからない。おそらく受験のストレスもあっただろうが。僕がとった行動は単純だった。兄の絶対しそうにないこと。これがその時の行動基準だった。ただ、逃げたくて必死だった。サボリ、ケンカ、万引き、恐喝。薬や煙草以外で、兄がやりそうにないことだったら何でもやった。母親に泣かれ、父親に殴られ、それでも僕は止めなかった。それまで優等生だった僕の豹変ぶりに、先生たちは驚き、怯えていた。

このまま転落していくのもいいかもしれない。兄から逃れられるなら。そう考えた時、ふと僕は気が付いた。その時点ですでに、兄に捕らわれていることに。

気づいたら、すべてが馬鹿らしくなった。今までやってきた事の意味を失った。僕は声を出して笑った。なんて自分は間抜けなのかと。ひとしきり笑ったら、怖くなくなった。兄に捕らわれていたってそれでいい。逃げることなんて無理だったのだ。そう開き直った僕は、再び優等生に戻った。高3の始めまでは授業も真面目に出していたため、卒業は出来たが、受験にはやはり遅かった。両親に頭を下げ、1年浪人して大学を受けることを告げた。母は安心してまた泣いた。父は難しい顔をしていたが、それでもその中に安堵が見て取れた。先生たちも、若さだなと笑ってくれた。

〈続く〉

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3342f/>

---

僕

2010年12月12日14時45分発行